

## は し が き

- 一 本書は、基礎から完成まで、ということを目標にして編集しました。
- 二 本文は日本古典文学大系『枕草子 紫式部日記』によりました。ただし、句読点や漢字・かなを若干改めました。
- 三 本書は第一部・第二部という二部構成になっておりますが、第一部には、内容的にもまた文章表現の上でも平易な諸段を収め、第二部には、これに比してむずかしい諸段を収めました。そして、第一部・第二部とも、随想・分類・回想の順に配列しました。(この句切りは、捺印で示しました。)このことによつて、本書所収の全段は、易から難へと配列された、ということができます。
- 四 脚注は、辞書を引く習慣をつけさせるため、固有名詞や特殊な語句に限りました。また「**重要語句**」の欄を設けて、学習のまとめの一助としました。
- 五 「**研究**」については次の点に留意しました。(1)読み・語意・部分訳・語法・文脈・内容探求・鑑賞等の全般にわたり、かたよらぬよう配慮しました。(2)解答の揺れるような問はできるだけ避け、そのおそれのある場合は、問い方に十分留意しました。(3)高度な問には、指導上の便宜を考え、※印を付しました。(4)抽出語句を本文中に見いだす便宜を考え(二四・12)のようにページ数・行数を示しました。(二六ページ参照)(5)記述式の間では、解答者を不当に拘束することを避けるため、「約何字」または「二〇―三〇字」のような字数の示し方をしました。また「**解答欄**」を下欄に設けました。

要抄枕草子 目次

解説 …………… 四

第一部

- 一 春はあけぼの……………(一段)……………七
- 二 卯月のつごもりがたに……………(一四段)……………九
- 三 五月ばかりなどに……………(二三段)……………一〇
- 四 賀茂へ参る道に……………(二六段)……………一三
- 五 八月つごもり……………(二七段)……………一四
- 六 いみじう暑きころ……………(二四段)……………一六
- 七 野分のまたの日こそ……………(二〇段)……………一七
- 八 月のいとあかきに……………(二三段)……………一〇
- 九 雪は……………(二五一段)……………二二

一〇 虫は……………(四三段)……………三三

- 一一 鳥は……………(四一段)……………三四
- 一二 せめて恐ろしきもの……………(二六四段)……………三六
- 一三 うつくしきもの……………(二五一段)……………三九
- 一四 ありがたきもの……………(七五段)……………三三
- 一五 はしたなきもの……………(二七段)……………三三
- 一六 すさまじきもの……………(二五段)……………三四
- 〔一〕すさまじきもの……………三四
- 〔二〕また、家の内なる男君の……………三六
- 〔三〕除目につかさ得ぬ人の家……………三九
- 一七 雪のいと高う降りたるを……………(二九九段)……………四一
- 一八 中納言参り給ひて……………(二〇二段)……………四三
- 一九 大藏卿ばかり……………(二七五段)……………四四

第二部

- 一〇 村上の前帝の御時に……………(二八二段)……………四四
- 一一 無名といふ琵琶の御琴を……………(九三段)……………四七

- 一二 九月ばかり……………(一三〇段)……………五〇
- 一三 雪のいと高うはあらで……………(二八一段)……………五三
- 一四 日のいとうららかなるに……………(三〇六段)……………五五
- 〔一〕日のいとうららかなるに……………五五
- 〔二〕小舟を見やるこそいみじけれ……………五五
- 一五 世の中になほいと心うき……………(二六七段)……………五九
- 一六 あてなるもの……………(四二段)……………六〇
- 一七 うれしきもの……………(二七六段)……………六二
- 〔一〕うれしきもの……………六二
- 〔二〕恥づかしき人の……………六三

二〇 にくきもの……………(二八段)……………四六

- 〔一〕にくきもの……………四六
- 〔二〕ものうらやみし……………四六
- 〔三〕ねぶたしと思ひて臥したるに……………四七
- 二一 心もとなきもの……………(二六〇段)……………五三
- 二二 木の花は……………(三七段)……………五五
- 二三 二月つごもりに……………(一〇六段)……………六二
- 二四 御方々・君達・上人など……………(二〇一段)……………六一
- 二五 御乳母の大輔の命婦……………(二四〇段)……………六二
- 二六 五月ばかり、月もなう……………(二三七段)……………六三
- 二七 七日の日の若菜を……………(二三一段)……………六七
- 二八 頭の中將の、すずろなる……………(八二段)……………六九
- 〔一〕頭の中將の、すずろなる……………六九
- 〔二〕みな寝て、つとめて……………七二

## 解 説

一時代 清少納言が一条天皇の中宮定子に宮仕えしたのは、九九三年のことで、定子十七歳、清少納言は二十八歳くらいであった。定子は中関白道隆の娘で、当時この一家は全盛時代であった。すなわち、父道隆の勢力を背景として、九九四年には、わずか二十一歳の伊周は内大臣に昇進、十六歳の隆家は従三位左中将に進み、また九九五年正月には、次女原子が東宮(後の三)の女御として入内した。

しかしこの年四月の道隆の死(四十三歳)は、中関白家の運命を一変した。関白の地位は弟道兼へ移り、さらに弟道長へと移った。こうして伊周・隆家の一家と御堂関白家との対立は激しくなり、ついに、伊周らの花山法皇に対する暴射事件(九九六年)がきっかけとなって、伊周は九州に、隆家は出雲に左遷されて、中関白家は没落した。この時定子は二十一歳であった。三年後、道長の娘彰子が一条天皇の女御として入内した。道長の外戚政策の第一着手であるが、定子にとってはいたましいことであった。定子はこのころから、実直だが身分は低い平生昌の邸に身を寄せて明け暮れることが多くなり、ついに、一〇〇〇年二十五歳の短い生涯を とじた。

二作者 清少納言の父は清原元輔(もとすけ)。曾祖父は同深養父である。深養父は『古今集』時代の歌人、元輔は『後撰集』の撰者で、いわゆる梨壺(なつば)の五人のひとりである。肥後守を最後として八十三歳でなくなっているから、受領階級に属する家系であるが、学者・芸術家としての天分は豊かに流れ伝わっていた。元輔の性格については『今昔物語』に「馴者のものをかしく言ひて人笑はするを役とする翁」とあり、その明るい好笑家的性格は、

清少納言にも伝わっている。

清少納言の生没年は不明だが、九六六年ごろの生まれで、六十歳前後で没したらしい。十六歳ごろ橘則光と結婚、一子を得たが後に離婚した。(ただし、離婚後も親交があったことは、八二段の記事で知られる。)父に死別後中宮定子のもとに宮仕えに出たが、その崩御の後は辞したらしく、宮仕えの期間は九九三—一〇〇〇年(または、その翌年あたり)と考えてよい。紫式部が彰子に仕えたのは、その辞任後数年してからであった。

三、成立・書名 『枕草子』が書き上げられたのは、記事の内容から見て普通一〇〇〇年のこととされている。すなわち定子の崩御した年である。しかし、最終段の跋文(はくぶん)めいた記事によると、すでに九九六年夏に、「つれづれなる里居(さとゐ)(私宅生活)のほどに書き集め」たこと、それが源経房に持ち出されて流布(りゅうぷ)するようになったことが知られる。したがって、まず第一次草稿本(九九六年)・第二次草稿本(一〇〇〇年)の成立が考えられるが、現在の『枕草子』を見ると、さらに一〇〇〇年以後の加筆と認むべき部分もあるので、結局三段階の過程を経て今日見るような全体ができあがったと考えられる。そしてその最終稿の成立は、おそらく一〇二一年以前であらう。

『枕草子』というこの奇妙な書名の由来は、跋文に暗示されている。伊周から料紙の献上を受けた中宮が、清少納言に「これに何を書かまし。」と相談したところ、「枕にこそは、はべらめ。」と答えたので、中宮はその返事が気に入って料紙を作者に下賜なさったというのである。したがって「枕にこそは……」が何を意味するかが問題になるのであるが、これには「座右に置いて離さぬもの」とする説(契沖説)や、「枕言すなわち題詞を集めたもの」とする説(季吟説)をはじめ、多くの説がある。

四、内容 『枕草子』は長短さまざまの三百余段から成っており、その各段の内容も、自然觀賞あり、人生的感

想あり、経験談あり、また和歌的題材の手控えありで、多種多様であるが、しかしそれらを整理してみると、ほぼ次の三つに分類される。

- (1) 分類の諸段 (2) 日記回想の諸段 (3) 随想の諸段

(1)はいわゆる「ものはづけ」の段で、「……は」または「……なるものは」という題詞をかかげて、それに類するものを列挙した段である。(2)はおもに作者の宮廷生活における体験談・回想記である。(3)は自然美や人生観などについての随想である。ところで現在伝わる写本には、「堀本」・「前田家本」のように、右の(1)・(2)・(3)が整然と分かれている類纂本と、「能因本」・「三卷本」のように、雑然と入りまじっている雑纂本とがある。そのいずれが「原型」に近いかについては、説が分かれているが、雑纂形態を「原型」とする説が有力である。と見てよからう。

『枕草子』は、随筆文学の最古の作品であるとともに、後の『徒然草』と並んで、日本随筆文学の双璧を成すものである。『徒然草』が、激しく揺れる時代の中で五十年近い生をきた兼好の、内省的・思索的・知性的・求道的作品であるのに対して、これは、おおかたは平安な宮廷生活の中に生きた三十代の一女性の、感性的・唯美的・情趣的な作品であり、浪漫性・青春性の満ちあふれた永遠の詩的散文である。

## 第一部

### 一 春はあけぼの

〔一段〕

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。秋は夕ぐれ。夕日のさして、山のはいと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音・虫の音など、はたいふべきにあらず。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわ

しろく「白く」とする説と、「著く」とする説がある。「紫だちたる」などの照応を考えると、前説がよいと思われる。紫だちたる「紫」は古代紫。強い赤みを帯びた紫で、ほとんど濃赤色に近い。  
月のころ 陰曆十日ごろから二十日ごろまでの、月のある時分をいう。

火桶 丸火鉢。

〔重要語句〕

- やうやう ○さらなり ○なほ  
○をかし ○あはれなり ○まいて  
○つとめて ○さらでも ○つきづきし  
○ゆるびもていく

し。

〔研究〕

一 次の各問に答えよ。

(1) 左の語は、現代語の場合と、意味や品詞がどう違うか。

(a) やうやう (b) つとめて

(2) 左の語句を口語に訳せ。

(a) 月のころはさらなり、 (b) はたいふべきにあらず。

(3) 「炭もてわたる」と「ゆるびもてらけば」の「もて」は、同じかどうか。

二 「鳥の寝どころへ行く」と「の」と同じ用法のものを、次の中から選べ。

① 夕日ゆふひをさして ② 山やまのはいと近う ③ 虫むしの音など

④ 雪ゆきの降りたるは

三 「さうでも」は、何を受けてそう言ったのか。

四 「まいて、雁などの……いとをかし。」の解釈として適当と思うものを、次の中から選べ。また、判断の理由を述べよ。

① 空にばらまいたように、雁なんかを列をなしているのが、たい

そう小さく見えるのは、まことにおもしろい。

② まして、雁なんか、一列に並んでいるけれども、たいそう小さく見えるのは、まことに趣が深い。

③ まして、雁なんか、列をなしているのが、たいそう小さく見えるのは、非常に趣がある。

五 「屋やになりて」以下のことを、作者は、なぜ「わろし」と評したのであろうか。(一五字前後)

二 卯月のつごもりがたに

〔二一四段〕

卯月うづきのつごもりがたに、初瀬はつせにまうでて、淀よどのわたりといふものをせしかば、船に車をかきす多て、菖蒲あやぶ・孤こなどの末の短く見えしを取らせたれば、いと長かりけり。狐積こみたる舟のありくこそ、いみじうをかしかりしか。「高瀬たかせの淀よどに」とは、これをよみけるなめりと見え。三日みか帰りしに、雨のすこし降りしほど、菖蒲あやぶ刈るとて、笠かさのいと小さき着ぎつつ、雁かりいと高き男おとこの童わらわなどのあるも、屏風びやうぶの絵ゑに似にていと

解答欄

5

15

10

5

初瀬 奈良県桜井市初瀬の長谷寺の渡船場。

狐「まこも」ともいう。水草の名。編んでむしろなどを作る。

高瀬 淀川の一部の名称。

屏風の絵 年中行事の絵、または各地の名所絵などを屏風にかいたもの。

○ つごもり ○ ありく ● よみける

をかし。

〔研究〕

- 一 「末の短く見えし」とあるが、なぜ短く見えたのか。(一〇字前後)
- 二 「菖蒲刈る」のは、何に用いるためか。また、どうしてそれがわかるか。(四〇字前後)
- 三 「脛いと高き男の童」とは、どんなかつこうをした少年をいうのか。(二五字以内)

四 「いみじうをかしかりしか。」を、品詞に分解し、活用語については、基本形と、ここに用いられている活用形とを言え。

※五 「高瀬の淀に」は、次の古歌をさしている。この歌全体を解釈せよ。また、傍線の部分(1)(2)(3)は、この歌の中で、修辭上どういう役目をしているか。

(1) こもまくら高瀬の淀にかるこものかるともわれは知らでたのまむ

(2) (3)

≡ 五月ばかりなどに

〔二三段〕

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く

15

解答欄

上はつれなくて・下はえならざりける 『拾遺集』恋四の「芦根はふ泥は上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を」による。

見えわたりたるに、上はつれなくて草生ひ茂りたるを、ながながとたださまに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などのあゆむにはしりあがりたる、いとをかし。左右にある垣にある、ものの枝などの、車の屋形などにさし入るを、急ぎとらへて折らむとするほどに、ふと過ぎてはづれたること、いと口惜しけれ。よもぎの、車におしひしがれたりけるが、輪の回りたるに、近ううちかかりたるもをかし。

5

〔研究〕

一 前段(一一四段)に「孤積みたる舟のありく」とあり、この段にも「山里にありく」とある。「ありく」は、現代語の「あるく」と、どう意味が違うか。

二 作者は、どこに身を置いているのか。また、「人などのあゆむ」の「人」は、作者とどういう関係にある人と思うか。

※三 次の(1)・(2)の解釈として適当と思うものを、それぞれの左にあげたものの中から選べ。

- (1) 上はつれなくて

① 表面にはそんな様子も見せずに。

15

解答欄

たださまに「直様に」で、まっすぐ、の意。

車の屋形 牛車の車箱。人の乗っている部分。

かかりたる 「かかへたる」の誤写であろう。香りがあたりにただよった、の意。

重要語句

●五月ばかり ○見えわたる ○つれなし ○えならず ●折らむとするほどに